

井深 大 対談

巢まい、子どもが育つ場所

ドアがなくてもプライバシーがあった

三澤 衣食住という字を、最近変えまして、医職住と。第二次就職、高齢化社会と、どうも世の中興味の持ち方が変わってきましたのでね。

井深 本当に、これは違ってこなきゃうそですね。もうちょっと物から離れて、心へ行かなきゃ…。何かしらん、物で行き詰まっちゃってて、それから抜け出さなきゃならないのだが、日本がやらなきゃしょうがないんじゃないかと思うんですがね。

三澤 日本は、そういうことは本来得意な…。

井深 そうなんです。西洋の考え方は、物が中心になってきているけれども、日本の古来は、心がもっと大切だったと思うんです。それが明治維新以来、物であんまり西欧と差があったものだから、目を奪われて、物、物ということだけで…。

三澤 日本は本来、物とか、金とか、ある人よりも何も無い人の方がよく言われる体質がありますから、心を考える方は日本人は得意だ。

井深 私もそう思いますね。それが、明治のときに間違ってきた。まず明治の志士たちが博覧会に行ったのが間違いだと思うんです。これはテレビの知識ですけどね。これですっかり目を奪われて、これは大変なギャップがあるということで、物で追いついていこうということから考えたものですから、教育も全部、それを基本にしたわけなんです。ね。

だから、明治4年ごろの小学令が初めてできたときは、これは福澤諭吉さんが、いままでの儒学は虚学であって、もっと実質の物理であるとか、科学であるとかというのを国民に広めていかなきゃ文明に追いついていけないから、実学というものをやろうということで、例えば小学校のカリキュラムというのが、物理、化学、数学が基準になったらいいですよ。

だけど、そのうちにすぐに3、4年たったら、今度は師範学校ができて、これはアメリカの人の指導らしいですけども、それで全国に師範学校をやって、教育というのは、師範学校が牛耳るんだという、だからこれも、どっちがいいか、あのまんま日本が進んでいたら、これはおもしろい国になったと思うんですがね。

三澤 そういう問題が家の中にもいろいろありまして、プライバシーというのは、ドアをピシッと締めちゃうというのが向こうのプライバシー、日本人は、障子とかふすまとかそういうもので、何か心のプライバシーという感じなんです。隣に何か物の気配がするというのはわかるわけですよ。ただ、見ちゃいけないものは見ないとか、聞いてもしゃべっていけないものはしゃべらない。非常に奥ゆかしくできているんです。心づかいというのか…。

井深 そうですね。障子からふすまから話が…。

三澤 本当は聞こえるんですけど、しゃべらないとか、聞かないふりをしておくとか…。

井深 そこら辺は本当に違うんですね。

三澤 だから、見たものをすぐ物としてとらえてしまうと、えらい間違いをする…。

住まいと巢まい

三澤 ところで、すまいという字を、住でなく巢という字で巢まいと読ませたいんです。鳥の巢というのは、雛が育つために巢があるわけで、親鳥は木の枝にとまって寝るわけですからね。すまいというのは、もともと子供が育つ場所じゃないかということで…。

井深 おもしろいな。

三澤 そしてよく見たら…。ホトトギスは他人の巢の中に卵を産むわけです。

井深 自分で子育てできない。

三澤 しないので、巢がないんですね。それからウマとかウシとか、赤ちゃんが生まれると、丈夫ですぐ立って歩く動物がある。

井深 20分かそこらで。

三澤 それも全部巢がないんですね。それからライオンとかトラなんか強そうに見えますけれども、赤ちゃんは弱いので巢があるわけです。そんなことで、どうもすまいというのは、子供のためにあるのじゃないか。住まいという字は、いつの間にか、人べんに主と書くようになったんですが、もともとは巢の字を当てていた。古事記の中にはちゃんと住まいの意味で巢の字を使っています。どうもどこかで間違ったんですね。だから、家を建てるときに、子供の部屋っていうのは、2階の隅に持って行っちゃいますけど、本当は中心になってないといけない。

井深 だけど、ヨーロッパ的な個人主義的な考えと、先ほども出た子ども中心といった考えとでは、やっぱり住まいも考え方が変わってくるんでしょうね。

三澤 ただ、ヨーロッパもよく聞いてみると、中学卒業するぐらいまでは個室がないんですね。

井深 ああ、そうですか。

三澤 寝るときだけ自分の部屋に入れるわけです。

井深 寝るときだけ。

三澤 だからベッドルームと言うわけです。

井深 それが日本は、何か…。

三澤 昼間から入れちゃうわけですね。本来昼間は大きいテーブルに、おにいちゃんが弟の勉強をみてやって、お母さんも手伝ってあげてという、本来は居間という、リビングルーム、生活の場なんです。ベッドルームを間違っって個室と訳した人が日本にいるんですね、それで昼間から部屋を与えちゃうことになった。

向こうの家を見ると、ずいぶんお金持ちの家でも、ベッドルームは小さいんですね、寝

るときだけです。昼間はそこにいないという。で、中学を終わったごろから、人格ができてから個室を与える。それまでは、いつもそばに置いてしつけしなきゃだめだということじゃないかと思うんですが。

井深 そこいらが、日本に輸入されたときにはき違えがあったのかもしれないですね。

三澤 そうですね。だから随分、個人個人と言ってますけど、家族がよく触れ合うようにして、そして一人前になると、大学とか高校の寮に入っても大丈夫。

井深 子育ても、インテリアが洋式化してきた現在と、昔の畳だけでダツと広いときとでは、子供の気質などに変化がありそうですが、そこいらはどうなんですか。

三澤 よくわかりませんが、随分違うんだと思いますですね。この間、先生に伺った話ですと、何かはいはいした方が子供のためになる。いきなり立つのはよくない。

井深 どうもはうってことは非常に基本的に大切なようです。最初の例は、精薄児の治療で、アメリカのフィラデルフィアのドーマン博士が世界的に有名なんですけど、その基本というのがはいはいなんですね。大人でも、それから中風になった人のリハビリでも、まずはわせるんですよ。やっぱり首周りというのは、西洋医学じゃ非常に弱いんですね。それなんかをはうということが、相当助けるみたいで、無理に歩かせるというのは、どうも余りよくなさそうなんですよ。

そうすると、今の生活様式になって、椅子、テーブルになっちゃうと、はう場所というのがない。はうことを少しやろうじゃないかというので、幼児開発協会で、池袋の西武に1室を貸してもらいまして、カーペットを敷いて、赤ちゃんの社交場なんです、はう赤ちゃんの。そこへお母さんが集まって、お母さんはお母さんたち、子供は子供同士、社交させるわけですよ。

三澤 生命の発生の順序に行くわけですね。

井深 そうなんです。そこの段階を少しちゃんとしておこうじゃないか。

三澤 歩く前にはわせる。

井深 はい。

三澤 ことし、私どもでサーキュレーションプランという家の間取りを出しまして。家じゅう、子供がぐるぐる回って歩けるんです。行きどまりじゃないわけですね。ドアあけて入ると、ぐるっと回れるんです。はいはいできるというのもあるし、お母さんに怒られても、逃げられるようになっている。逃げているうちに反省をちゃんとしてもらえるということだと思っただけ、やはり部屋に押しこめられて、つかまってお説教されるというのは、どうも困るんですな。逃げているうちに、猛反省しよう。1階と2階もぐるぐる回れるようになりまして、したがって、子供の運動というのは無限大になったわけです。行きどまりがなくなり、結構子供さんには評判がいいですね。階段とかマントルピースが中心になって、玄関から台所、居間、客間をぐるぐると回れるようにする。2階もそういうふうにしました。

私も子供のころやはり家が広くて、縁側とかそういうところで、飛んで歩いてたような

記憶があるんですよ。今の家じゃあ、どうも…。

井深 縁側なんていうのは、おもしろい存在ですよ。

三澤 縁側というのは、外の空間と内の空間との中間のところで、日本人の白でもない、黒でもない、おもしろい性格があるわけです。尻を縁側の方に入れて、足を外に出しますね。ああいうのが日本人は、大好きなんだと思うんです。

西洋の白だ、黒だ、インテリアだという言葉があるんですが、あれがどうも似合わないんですね。家の中があって、庭があって、さらに宇宙へつながっている考え方というのは、日本人がもともと得意だったんじゃないかと思うんです。その縁側が全部なくなりましたので、最近、インテリアとか、エクステリアとか言っているものですから、どうも何か話がつまらない。おもしろくない。日本人は、そういう中間的な考え方を非常にうまくやってきたような気がするんですけどね。

日本人の知恵と感性

井深 やっぱり外気の温度というのが、直接肌に触れてくるような感じのところ四季があって、順応性みたいなものができてくるのでしょうか。

三澤 障子も、結構寒いように見えるんですけど、障子の紙というのは、ガラスよりずっと断熱性がありますから、障子の方があったかいわけです。ガラス戸を閉めておいた方が寒いんですね。その辺は随分知恵を使って考えていると…。

井深 そうですね。白い紙の障子なんていうのは…。

三澤 それからふすまの中って、こう木枠がマスになってますね。あれは計算しますと、あのマスの厚みが、空気が動かない最大の大きさなんです。それで部屋と部屋との断熱性がものすごくよくなるわけです。

井深 空気が、あのますの中で…。

三澤 動かない。そうすると、断熱性が最高にいいわけですから、経験的にきめられた大きさというのは…。

井深 何センチですか、大体。

三澤 大体、三尺を3つに割るから一尺でしょうか。厚みがまた絶妙で、1センチ5ミリぐらい。それへ紙を張ったときに、空気が動かなくなる。

井深 すごいもんですね、そういう知恵って。

三澤 ええ。それから、外国の人がすごいと驚くのが、ドアと引き戸の違いですね。ドアというのは、空間を大分使いますが、引き戸はゼロで…。

井深 自動車だって全部引き戸にしたら、パーキングロットだって3分の1ぐらい得になるんじゃないかと思うんですがね。

三澤 風呂敷の発明みたいなもので、随分日本人は天才的に物を消費したという…。

井深 私がびっくりしたのは、奈良の東大寺で2、3年前、瓦を全部20万枚おろしたんですよ。

そしたら、軒が 20 センチ上がったそうですね、目方で。それが、瓦をおくと理想的なカーブが出ているんだそうですよ。

三澤 ほほう。

井深 どういうところからそういう知恵が出てきたのかわからないと、清水建設の人から説明してもらいましたけれども、ちょっと驚きましたね。勘というものが、非常にそういうものの技術的な面をカバーしている。

三澤 日本人が自慢していいと思うのは、一間という大きさが手の長さですよ。日本の面積とか長さというのは、体の寸法からできてますから、人間工学的にスタートしたので、1メートルの、地球の何万分の1のというのとわけが違う。その中でも、日本家屋学のもジュールというのはよくできてます。というのは、三尺とか一間とか中途半端な数字に見られますけれども、本当によくできていたと思いますね。

井深 坪というのがいつまでたっても残っていますね。

三澤 残っている。

井深 これは単なる習慣だけの問題じゃないでしょうね。便利さという…。

三澤 便利にできていたんですね。

井深 日本の国、国土からくる広さを勘定するのに。

三澤 今、資料を集めているんですが、各雑誌社にお願いして、大物 50 名の方に、子供のころどんなところへ住んでいたか、一生懸命取材に歩いているわけです。何らかの共通項とか、不思議な話がありそうだとすることで。その中の1つに、天井が高いと、創造性が豊かになるということをおっしゃっている人が随分いまして、成長期に理想的な家が、何かあるかもしれない。

井深 あるかもしれないね、何か。

三澤 まあ、日本の家屋というのは、ついこの間までかぎがなく、私どもの田舎でも、かぎをつけると変人だと言われたんです。要するに地域社会に泥棒がないわけですね。だからかぎは要らない。奄美大島へ行くとかぎはないんですね。だから夜ばいなんていうのがあるわけですがけれども、自然に溶け込んで生活するというんですか。

古くは、戦争がなかったからだと言われる方もありますね。戦争といっても、日本の戦争は、男どもが原っぱに集まってやるわけですから、スポーツみたいなもので、それで女、子供は殺しちゃいけないというルールがあるわけです。西洋人に言うと、日本というのは戦争がなく、スポーツの国であって、どちらが強いかというのを誇示して政権が移っていく。

そこへ行くとヨーロッパの方は、血と血の争いですから、本当に女、子供を殺すわけです。したがって、窓が小さくなって、閉鎖的になっていて、解放的な家じゃない。それが平和になってくると、日本の家屋の形態というのは、平和に合ってますから、評価され出したということになります。

ロックフェラーが、わざわざ日本から大工を呼んで日本家屋をつくって自宅にしている。

井深 1番の違いはお風呂だと思うんだけどな。日本人のデリケートな感性というようなものと、日本家屋とは、かかわりがあるんでしょうね。

三澤 あるんだと思いますね。木材にペンキを塗らないで、木の目をそのまま残しておくというようなのは、成長期にいろいろ感じ方が違うかもしれないですね。

“さしすせそ”がなくなった

三澤 最近、住宅の中に「さしすせそ」がなくなってきたというのです。「さ」が裁縫なんですね。「し」がしつけ、それから炊事、洗濯、掃除なんですね。ホームオートメーションになった。ホームオートメーションの中でなくしちゃいけないのがしつけですよ。ところがしつけは、塾へ外注してしまう…。

井深 うんうん。

三澤 それで、子供のことをしつけしないわけです。「さしすせそ」がへって暇な主婦がどうなるかという、こういう市場調査をやっています。

井深 これから重視していかなきゃならないのは、しつけなんですけど、小さい子供に厳しいしつけというのは、かわいそうだという感じがあるんですけど、ある年齢以下のときにしつければ、厳しいという感じを受けないわけなんです。だから、何でもないときに、1番やりにくいことをやっておくということ、これがちょっと忘れられているような気がする。小さい子供のお尻をひっぱたくとは何ごとかとか、いつまでも便器の上へ腰かけさせておいて、かわいそうじゃないかというけど、何も残らないんですよ。

思い出すんだけど、浜尾侍従だったかな、浩宮様を1歳3ヵ月のときからお預かりして、たたいてもいいですかと伺ったら、美智子妃殿下がどうぞ必要な時はたたいてください。ただし、その後で理由を教えてくださいよと、そう言われた。それを浜尾さんから聞いたのが、非常に印象深かった。あとになって、そんなしょっちゅうはたたいたわけじゃなかったけれども、テレビにいつまでもかじりついて寝ないんで、たたいたって。テレビを見て、だから相当大きいだらうと思うんですが、それでも全然そういうことは、浩宮様が覚えておられない。あとでおそるおそる聞いたんだそうですが、覚えてないと言って…。

だから、人間3、4歳以前の記憶というのは、残らないんですよ。そのときに1番やりにくい、厳しいしつけっていうのをやっておくべきだとういうのを、このごろ私は考え出しているんですけどね。

三澤 耳が痛いお父さん、お母さんは多いでしょうね。塾なんかもそのようですね。学校へ行って、また塾へ行く、大変だと思うんだけど、子供は案外…。

井深 もしも、その塾が喜んで行ける状態にあったら、これはもう。喜んで行くか、負担に感じて行くかということだけが問題だと思うんです。

三澤 学年のクラスの友達が倍になる。塾の友達と学校の友達と。それでまた、高校、大学へ行って一緒だったりして、結構おもしろいんだってね。塾で一緒にやった連中の方が仲がいい

い。子供はあんまり苦しめてないみたいです。

井深 この間、私、名古屋の河合塾に見学に行きまして、それでびっくりしたのは、チューターというのがいて、20人とか、50人の生徒に1人ついていて指導にあたっているんだそうですね。そのチューターというのは、授業はやらなくて、相談にだけ乗るんですね、子供たちの。

それで個人的なよろず相談に乗ってやるんですね。それで個室がたくさんあって、チューターが、学生に学問のことから、恋愛問題から、家庭問題から、進学だけじゃなしに、何でも話できるような、そういうふうにかさえてある。その上に、またもう1つ偉い人がいて、チューターの手に負えないのはその人に預けるといって、あくまで塾というところを守っているんですね。予備校だ、受験準備企業だなんていうが、学校よりよっぽどまともなことをしているんですね。

三澤 その辺の問題を片づけてやるのは、子供には大きな問題でしょうからね。やはり子供にしてみたら、本気で怒ってくれるとか、対等に自分を扱ってくれるということの方が心に残るわけです。それが今のところ学校ではなくて、塾に移っているのかもしれないね。

井深 それと、何か指導者がちゅうちょしてしまって、例えばボーイスカウトで、昔はずいぶん規律正しくやったんだけど、戦後、民主主義が台頭して、ちょっと危ない、危険なことっていうと、まずお母さんがめくじら立てちゃって。ボーイスカウトですらですよ。それだから、指導者はみんな遠慮しちゃって、だんだんピリッとしたことがやれなくなっちゃうんですね。

そういうことは最初に条件として、訓練中は全部先生に任すんだということまで徹底しなきゃさだと思っただけなんですけどね。何も悪気があってしかるわけじゃないですからね。

三澤 うらみがあるわけじゃないからね。しかし、子供の方も、ちょっと何かやると、すぐ手を折ってしまったり、足を折ってしまったりするのでね。

井深 それは骨がだめになって…。これはどうなんですか。骨が弱くなったというのは、人工栄養ですか。

三澤 どうなんですかね。やっぱり日照のこともあるんでしょうし、骨が細いといえますか。運動量もきっと少ないでしょうね。

井深 そうね。すぐバスに乗って、自家用車に乗ってということになっちゃうから。最後に昔は住まいの中で、大家族制がとられていたわけだけども、これからまたおじいちゃん、おばあちゃんとの同居みたいなのがふえてくるようですが…。

三澤 私どもでは、今三世代家族がいいという方向になっていますね。これは日本人本来の方向ということですが、1つは余暇がふえてきたものですから、女房だけじゃなく、やっぱり男同士でやることもあるわけですね。おじいちゃんとお父さんと男の子と将棋をやるとか、高校野球を見るとか。

余暇がふえてきたから、メンバーが多い方がいいという感じと、それからもう1つは、アメリカのような国の上流社会は、三世代が非常に多いわけですね。そういう意味で、心の

豊かさという意味では、余裕さえあれば、一緒に暮らした方がいいなと、ごく自然にそう思っているような感じがしますね。それで、おじいさんの話、おばあさんの話を、孫が聞くか聞かないかはともかくとして、自然とそういう方向に…。

井深 何百年間の伝統の反動が、戦争後ワッと起きたんですよ。それでこれは自由になって、いなと思ったんだけども、やってみたら、やっぱり昔の方がよかったわという、そんな感じだから、案外、急速に伸びてくるんじゃないですかね、豊かになってくると。

三澤 この間、中国の方が言いました。孟子の73代目という人です。それで驚いたのは孟子というのは、百代まで名前をつくって死んだんですって。すごい人もいるもんだと思いました。百代まで子供の名前を決めている…。本当ですかって話を聞いたら、次の代はこういう名前になりますって。

井深 ずいぶんスケールの大きな話だな。

おわり